

5-1		主題	全員で取り組む尿測キャンペーン	
職員の意識改革		副題	トイレでの排泄に喜びを感じられるように	
トイレで排泄をする				
研究期間	5ヶ月	事業所	墨田区特別養護老人ホーム はなみずきホーム	
発表者：大川絵理（おおかわえり）		アドバイザー：酒井真希子（ユニチャームメンリック）		
共同研究者：宮田雅子（みやたまさこ）				
電話	03-3617-8734	メール		
FAX	03-3617-8088	URL		

今回発表の事業所やサービスの紹介	はなみずきホームは東京都墨田区八広に位置する、社会福祉法人賛育会が墨田区の指定管理者として運営する特別養護老人ホームである。この研究を始めた当初（2009年12月）、ホームの平均介護度は4を超えていた。また、排泄介護状況は利用者52名中、「自立者」は3名、尿意の有無は関係なく、何らかの形でトイレ・Pトイレへ誘導している「一部介助者」は37名、オムツ交換対応である「全介助者」は12名だった。
------------------	--

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>今まで利用者の排泄介助において、できる限りオムツへの排泄は避け、あくまでも人間らしいトイレでの排泄を目指し、それにこだわった排泄介助を考え続けてきた。しかし現状として、トイレ誘導という業務には次のような課題が見えてきていた。施設で決めた時間に利用者をトイレに誘導しても、パットにすでに失禁してしまっていることが多く、トイレで排泄をしていただくという工夫をしない。そうするとトイレはただのパット交換の場になってしまうこと、また、他業務の忙しさを考え、時間より早めにトイレ誘導を始める職員が多く、次の時間には衣類まで失禁してしまいかえって利用者・職員ともに負担となってしまうこと、もう少しトイレで自立排泄をする大切さ・意味を理解して援助に当たってほしい。</p> <p>このような排泄介助の基本を見直すべく、排泄委員として何か改善策をたてたいと感じた。</p>
--

<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>第一の目標は職員の意識改革である。本来のトイレ誘導の意義とは、利用者の自立を支援するためトイレでの排泄を促し、パット等の装着や失禁の不快感を取り除くために行うこと。それには、尿意が無い利用者でも、一人一人がなるべくトイレで排泄ができるような時間を調査・分析することから始まる。個々の利用者にあったトイレの時間を大まかにでも導き出し、少しでもパット等への失禁はなくしたい。尿意が曖昧な利用者をただ「トイレ誘導の時間」だからトイレに誘導し座っていただくだけではなく、せっかくその方に合った時間なのだから、腹圧をかけたり陰部を刺激したり、「トイレに座っているからおしっこをしてください」と声をかけたりするなど、トイレですっきり排泄をしていただく工夫を実践することで、トイレ誘導という業務全体への意識の改善を期待した。</p>
--

《具体的な取り組みの内容》

〈期間〉 2009年11月より約5ヶ月

〈事前準備〉 アドバイザーより、排泄担当と職員全員 28名に対し勉強会を実施。

(TENA「尿失禁と個別ケアの基礎」参照)
排泄担当から担当以外の職員へ、取り組みの経緯や具体的な尿量測定方法を口頭で1人1人に説明し協力を求めた。

〈対象者〉 29名

利用者52名中、トイレやポータブルトイレに誘導している一部介助者37名のうち、失禁のタイプが切迫性、機能性タイプに当てはまる方を対象とした。(排尿チェック票参照)

〈尿測期間〉 2009.12.1～2010.1.29の約2ヶ月間

〈道具〉 ユーリンパン(排尿計測器)

〈方法〉 各フロアー約2名ずつ、ご利用者1名につき5日間、日中の排尿量(パットの重さとトイレへの排尿はユーリンパンを設置し計測)と水分量(尿測中と分かる様に、専用コップを用意)を正確に計測し、専用の尿測表に記録する。対応職員は、午前中は早番、午後は遅番と決め、更に職員名を書いた尿測カレンダーや尿測表を用意し、責任を持って取り組めるように工夫した。

尿測表を元に、排泄担当とアドバイザーでデータ分析を実施。利用者1人1人に合ったトイレの時間を設定した。

《取り組みの結果と評価》

職員の排泄介助の意識が向上した。まず、尿量測定表への記入漏れがほぼ見られなかった。積極的に職員全員が責任を持って取り組む様子が見られた。

次に尿量測定期間中は、トイレに出た排尿量を計測するため、職員からは「トイレでこれだけ排尿が出ていたなんて知らなかった」など報告があった。トイレにおしっこが出た喜びをご利用者と一緒に職員も感じることができるようになった。尿量測定後も個別に設定した排泄時間に、トイレで排尿を促すための声掛けや、姿勢を意識した様子が職員全体に見られるようになった。

結果、トイレでの排尿回数が増加した。以下は利用者の1ヶ月のトイレでの排尿回数である。
Mさん 2009年9月19回→2010年4月34回
Iさん 2009年9月36回→2010年4月70回
職員の意識が変わった成果である。

《まとめ》

排泄委員の今後の課題は、今回職員が感じることができた、トイレで排泄することの大切さや喜びを今後も忘れないようにするため職員へ呼び掛けていくこと、そして利用者がトイレで排泄ができる時間の見直しを継続していくことである。

《参考文献》

『TENA ワークショップ② 真の自立につながるトイレトレーニング』ユニ・チャームメンリッケ株式会社

《提案と発信》

その日の体調・天気・水分摂取量などによって、トイレに行く回数・時間は変わっていく。もちろん今回行ったような尿量測定で完全に失禁をなくすことはできないが、それは決して失敗ではない。「排泄」という生物にとって当たり前の動作を、安易にあきらめずに工夫する。そんな小さなことでも職員の介護への意識改革につながっていくと期待できるので興味を持って取り組むことが大切と思う。

【メモ欄】